

印欧語の「肝臓」

風間, 喜代三

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

30

(発行年 / Year)

1997-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004572>

印欧語の「肝臓」

風 間 喜代三

古代の人々が身体の組織について、現代の我々にまさるとも劣らない知識をもっていたことは、文献的にも明らかである。これは恐らく祭式において、動物を殺して神に犠牲として捧げるとか、それによって占いをするなどのことがしばしば行われていたために、人々が自然に身体の解剖に興味を抱くようになったからであろう。また争いごとも多く、そのために人の死を目のあたりにして、そこから身体のさまざまな部分の観察が進んだのではないかと思う。因みに、「身体」をあらわす skr. *śārīra-*, gr. *σῶμα* がともに本来は「死体」であったということは、古い印欧語族の解剖学的な知識の深さと符合する⁽¹⁾。本論文では文献にあらわれた彼らのその知識を基に、とくに「肝臓」にまつわる表現と事実に注目し、印欧語族とこの内臓器官のかかわりを明らかにしたいと思う。

その知識のほどを知る一例として、古代インドの最古の詩集であるリグ・ヴェーダ (RV) から、「衰弱に対する歌」10, 163 を引用しよう (辻直四郎訳岩波文庫 365f.)。

akṣībhyām te nāsikābhyām kārṇābhyām chūbukād ādhi / yākṣmam śīrṣaṇyām mastīṣkāḥ jihvāyā vī vṛhāmi te // 「お前の两眼から、両鼻孔から、両耳から、顎から、私は頭の衰弱を駆逐する、お前の脳髓から、舌から」 (1). *grīvābhyas ta uṣṇīhābhyah kīkasābhyo anūkyāt / yākṣmaṁ doṣaṇyām āmsābhyām bāhūbhyām vī vṛhāmi te. // 「お前の顎から、頸椎から、肋骨から、背柱から、私は前腕の衰弱を駆逐する、お前の両肩から、両腕から」* (2). *āntṛébhyas te gūdābhyo vaniṣṭhór hṛdayād ādhi/ yākṣmam mātasanābhyām yaknāḥ plāsībhyo vī vṛhāmi te // 「お前の臓腑から、直腸から、結腸から、心臓から、お前の両腎臓から、肝臓から、尿道(?)から、私は衰弱を駆逐する」* (3). *ūrūbhyām te aṣṭhivādbhyām pārṣṇibhyām prāpadābhyām / yākṣmaṁ śrōṇibhyām bhāsadād bhāmsaso vī*

vṛhāmi te // 「お前の両股から、両膝から、両踵から、両足先から、お前の腰から、尻から、肛門(?)から、私は衰弱を駆逐する」(4)。méhanād vanamkāraṇāl lómabhyas te nakhébhyaḥ / yákṣmaṁ sārvasmād ātmanās tām idam ví vṛhāmi te // 「お前の男根から、膀胱(?)から、毛髪から、爪から、お前の全身から、私はここにその衰弱を駆逐する」(5)。āṅgād-āṅgāl lómno-lomno jātām pārvaṇi-parvaṇi / yákṣmam sārvasmād ātmanās tām idam ví vṛhāmi te // 「一つ一つの肢体から、一本一本の毛髪から、一つ一つの関節から生じた(衰弱)、お前の全身から、私はここにその衰弱を駆逐する」(6)。

これは yákṣma- とよばれている「衰弱」を伴う病、とくに癆がいを癒すための祈りの歌である⁽²⁾。ここにあげられている身体の各部分のうち、plāśín-, mātasma- など古註をみても必ずしもそれがどこを指すのか明確ではない名稱もふくまれているが、全体としては頭から下半身にかけて、身体を的確にとらえて分類している。従って古代インド人の解剖の知識が、当時としてはかなり進んでいたように思われる。そしてこのような身体名稱を列挙するという方法は、例えば犠牲獣の身体の一つ一つを神々などに引き当てることによって、その動物を稱えるときにも用いられる⁽³⁾。

リグ・ヴェーダよりもはるかに日常的な生活を背景にしたアタルヴァ・ヴェーダをみると、先にあげた RV 10, 163, 3 をふまえながら完全な健康を願う呪文が AV 2, 33, 3 にみられるが、ここではやや異なる名稱が並べられている。hṛdayatte pári klonnó hálíkṣṇātpārśvábhyām / yákṣmaṁ mātasnābhyām plīhnó yaknāste ví vṛhāmasi // 「お前の心臓から、肺臓から、内臓(?)から、両脇腹から、お前の両腎臓から、脾臓から、肝臓から、我らは衰弱を駆逐する」。同じ歌集の 10, 9 は犠牲牛をテーマにしているが、ここでは「唇、鼻孔、角、眼」に続いて、15-16 につきのような身体名稱があげられている。それは kломá, hṛdayam, purítát, kaṅṭhas, yákr̥t, mātasne, āntrám, gúdās 「肺臓、心臓、心膜(?)、喉、肝臓、腎臓、臓腑、腸」である。

この表現の形式はブラーフマナの散文にも守られている。つぎにあげるシャタパタ Śatapatha Brāhmaṇa からの一文(10, 6, 4, 1)はその典型で、犠牲の馬の身体の各部分を、暁の女神をはじめとするもろもろの神や自然に配している。uśā vá ásvasya médhyasya śíraḥ / sūryaścákṣur vātaḥ prāṇo vyāttam agnirvaiśvānarāḥ sarṁvatsará ātmāśvasya médhyasya dyaúṣṛṣṭhām

antárikṣam udáram pṛthivī pājasyāṁ díśaḥ pārsvé avāntaradíśaḥ
pársava ṛtavó 'ṅgāni māsāścārdhamāsāśca parváṅyahorātrāṇi prati-
ṣṭhā náksatrāṇyāsthīni nábho māmśānyúvadhyaṁ síkatāḥ síndhavo
gudā yákrcca klomānaśca párvatā óśadhayaśca vānaspatayaśca
lómany... 「眞に曉は（犠牲の）聖き馬の頭，太陽は眼，風は呼氣，万人に共
通の火は咽喉，年は聖き馬の身体，天は背，虚空は腹，大地は下腹部，四方は
脇腹，その中間の四方は肋骨，季節は肢体，月々と半月は関節，昼夜は足，星
は骨，空は肉，砂は胃腸，川は腸，山は肝臓と肺臓，植物と木は毛髪，…」。

このヴェーダ文献にみられる身体の知識は，パーリ語で綴られた古い仏教
教典にも認められる。もっとも古層に属するスッタニパータ Sutta-nipāta
（『経集成』）に，つぎのような詩句がある。Aṭṭhīnāharusaññutto tacamañ-
sāvalepano / chaviyā kāyo paṭicchanno yathābhūtaṁ na dissati, //
antapūro udarapūro yakapeḷassa vatthino / hadayassa papphāsassa
vakkassa pihakassa ca // siṅghāṇikāya kheḷassa sedassa medassa ca
/ lohitaśca lasikāya pittassa ca vasāya ca. // 「身体は骨と筋によってつな
がれ，深皮と肉とで塗られ，表皮で覆われていて，如実にはみられない。腸に
充ち胃に充ちていち，肝臓の塊，膀胱，心臓，肺臓，腎臓，脾臓の（属する身
体は），鼻汁，唾液，汗，脂肪，血，関節滑液，胆汁，脊の（属する身体は）」
（194-196）。紀元前2世紀の後半に現在のアフガニスタンのカブールの地域を
中心に支配していたバクトリアの王メナンドロス Menandros は，ギリシア人
でありながら仏教の僧ナーガセーナ Nāgasēna と討論を試みて，遂に仏教に
歸依したといわれている。その二人の問答を記録したパーリ語による「ミリン
ダ王問経，Milindapañha の第1巻第1章において，ナーガセーナは人間の名
稱には人格的な実体はないと述べて，それを身体の各部分について否定してい
る（Pali Text p.26）。その配列の順序は，keśa, loma, nakhā,dantā, taco,
māmśam, nahāru, aṭṭhi, aṭṭhimiñjā 「髪，身毛，爪，齒，皮膚，肉，筋，
骨，骨髄」に續いて vakkam, hadayam, yakanam, kilomakam, pihakam,
papphāsam 「腎臓，心臓，肝臓，助膜，脾臓，肺臓」，それから antam,
antaguṇam, udariyam, karīsam, pittam, semham, pubbo, lohitaṁ,
sedo, medo, assu, vasā, kheḷo, siṅghāṇikā, lasikā, muttam, matthake,
matthaluṅgam 「腸，腸間膜，胃，糞，胆汁，痰，膿，血，汗，脂肪，涙，
脊，唾液，鼻汁，関節滑液，尿，頭に脳髄」である。この32が傳統的にパー

り語文献では身体を構成する要素とされている。このリストをみると、skr. klomán-「肺臓」に相当する kilomaka- が「肋膜」とされ、「肺臓」には papphāsa- (skr. pupphusa-) という、いかにも擬音語的な形が使われている。これはパリー語とヴェーダ語との方言差であり、その他の点ではほぼサンスクリットの語彙が再現している。因みに、有名なカニシカ王 Kaniska の侍医という伝えのあるチャラカ Caraka の名を冠した医学書 Caraka saṁhitā の śarīrasthānam「身体部」7, 7 以下にも眼、耳などの五感 cetana と、頭、心臓などの気管 prāṇa に續いて、内臓 koṣṭhāṅgāni として 15 の器官が認められている⁽⁴⁾。

これら古代インドの最古の讃歌集から後世の医学書までを概観してみると、肝臓 yákr̥t- は心臓 hṛdaya-, あるいは肺臓 klomán-, 腎臓 mātasna-, vṛkká- とともに想起され、一群の臓器としてとらえられていたことがわかる。このような理解は、インド・アリア人が早くから身体についての細かい観察によって解剖の知識を身につけていたことを物語っている。恐らく肝臓は心臓と並んで生命を支えるもっとも重要な器官だという認識を、彼らはもっていたに違いない。しかし後世の医学書は別として、ヴェーダ時代に彼らが直接その事実にふれて、それを記録し説明している箇所は指摘されていない。また後述するような、肝臓による古いが行なわれていた跡もみ当たらない⁽⁵⁾。

「肝臓」について、skr. yákr̥t- と同じ語源で、しかも heteroclitica の特異な曲用を示す ἥπαρ (gen. ἥπατος) をもつギリシア人は、ホメロスの英雄時代から肝臓の位置についてかなりの確かな表現を残している。イリアス Ilias のなかから、それをふくむ詩句を引用しよう。τὸν δ' ὡς οὖν ἐνόησ' Ἐδαίμονος ἀγλαὸς υἱὸς / Εὐρύπυλος πυκινοῖσι βιαζόμενον βελέεσσι, / στή ῥα παρ' αὐτὸν ἰών, καὶ ἀκόντισε δουρὶ φαεινῶ, / καὶ βάλε Φανυσιάδην Ἀπισάονα, ποιμένα λαῶν, / ἥπαρ ὑπὸ πραπίδων, εἴθαρ δ' ὑπὸ γούνατ' ἔλυσεν・「さてエウアイモンの輝かしい息子エウリュピュロスは、降りしきる槍に苦戦をいられている彼(アイアス)を認めたとき、彼のそばにたって立った。そして輝く槍を投げて、軍勢の長パウシオスの子アピサオンの横隔膜の下の肝臓をうち、たちまちにその膝を崩れさせた」(11, 575-79, cf. 13, 411-12; 17, 348-49)。ここで問題は ἥπαρ ὑπὸ πραπίδων「横隔膜の下の肝臓」という表現だが、この πραπίδες という複数名詞はホメロスに 11 回用いられ、古来

φρήν, (pl.) φρένες「横隔膜, 心, 考え」と同じ意味をあらわす語と解釈されている。確かにアキレウスの盾をつくるヘーパイストス神の描寫にあるような *ποίει δαίδαλα πολλὰ λδύησι πραπίδεσσιν*「技に通じた心で多くの飾りをつくる」(Il. 18, 482) の *dat. πραπίδεσσιν*「心で」をみると、この語は *φρήν* と同じかなり幅広い内容を持ち、必ずしも「横隔膜」だけに限定できないように思われる。しかしその一方で、オデュッセイア *Odysseia* にはつぎのような表現が認められる。これはオデュッセウスが怪物のキュクロプスをなんとかして殺そうと思いつめぐらしている場面である。 *τὸν μὲν ἐγὼ βούλευσα κατὰ μεγαλήτορα θυμὸν / ἄσσον ἰών, ξίφος οἰδ' ἐρυσσάμενος παρὰ μηροῦ, / οὐτάμεναι πρὸς στήθος, ὄθι φρένες ἤπαρ ἔχουσι, / χεῖρ' ἐπιμασσάμενος. ἕτερος δέ με θυμὸς ἐρυκεν.*「私は大いなる心のなかで考えた、あいつに近づいて、鋭い刀を腰から抜いて、手探りをして、横隔膜 *φρένες* が肝臓を保持している胸のところを突き刺してやろうかと。だがまた別の思いが私をひきとめた」(9, 299-302)。ここにいう *ὄθι φρένες ἤπαρ ἔχουσι*「横隔膜が肝臓を保持しているところ」というのは、簡単にいえば、わき腹の急所であろう。そこでこれを先に引用したイリアスの表現とあわせて考えると、*πραπίδες* あるいは *φρένες* と *ἤπαρ*「肝臓」は、密着した位置にあることは疑いない。*πραπίδες* と *φρένες* は、前者は詩語として孤立し、派生語もたないのに対して、後者は多くの派生形をつくり、頻度もはるかに高い。その意味でも完全な同意語とはいえないが、*ἤπαρ* との関係からは互いに重なりあっているといえよう。そして肝臓の位置を示す貴重な表現を提供している⁶⁾。

ホメロスの争いの場面から、肝臓にふれた例をさらにあげておこう。これは故郷に歸ったオデュッセウスが、その留守の家を荒らした妻への求婚者エウリュマコスをうつところである。 *ὁ δ' ἀμαρτηῆ διος Ὀδυσσεὺς / ἰὼν ἀποπροΐει, βάλε δὲ στήθος παρὰ μαζόν, / ἐν δέ οἱ ἤπατι πῆξε θοὸν βέλος.*「だが同時に尊いオデュッセウスが矢を放つと、胸の乳首のわきに当り、早い矢は肝臓に突き刺さった」(Od. 22, 81-83)。同じ叙事詩の有名なオデュッセウスの地獄めぐりの巻では、ゼウスと大地ガイアの子で、ヘーラの策によってレートを誘惑しようとしたティテュオスが、罪に苦しむ哀れな姿が描かれている。 *καὶ Τιτυὸν εἶδον, Γαίης ἐρικυδέος υἱόν, / κείμενον ἐν δαπέδῳ · ὁ δ' ἐπ' ἐννέα κείτο πέλεθρα, / γοπε δέ μιν ἐκάτερθε παρημένῳ ἤπαρ*

ἐκείρον, / δέρτρον ἔσω δύνοντες・ὁ δ' οὐκ ἀπαμύνητο χερσὶ・「そして彼は、名高いガイアの息子ティテュオスが大地に横たわっているのをみた。その(身体)は9反にわたって横たわっていたが、2羽の秃鷹が両側にいて、臓腑のなかに頭をいれて肝臓を食いちぎっていた。しかし彼はそれを手で追いはらえなかった」(Od. 11, 576-79)。因みに、この残酷な場面を、ローマの詩人ホラティウス Horatius. は、つぎのように歌っている。incontinentis nec Tityi iecur / reliquit ales, nequitiae additus custos. 「飽くことなき欲情をもつティテュオスの肝臓を秃鷹はすて去らなかつた。その悪行の見張りに当てられて」(『歌集』 Carmina 3, 4, 77-79)。

これらのホメロスの例からも明らかのように、肝臓は心臓と並ぶ急所である。そこで死、とくに自殺の場合に刀を刺すところとしてしばしば言及される。その例を悲劇作品から引用しよう。ソポクレス Sophocles の「アンティゴネ」Antigone の終幕近く、使者がクレオンに、その子ハイモンの死に續いて、その妻であるエウリュディケの自殺を説明する場面がある。παίσασ' υφ' ἧπαρ αὐτόχειρ αὐτήν, ὅπως / παιδὸς τὸδ' ἦσθετ' ὀφρὸν κούτον πάθος. 「ご子息の辛い嘆きの声につつまれた悲運をきくや、肝臓の下を自らの手で刺して」(1315-16)。この「肝臓を刺す」という表現はエウリピデス Euripides にもみられる。「オレステス」Orestes が姉のエレクトラにむかってその覺悟を述べる台詞に *κἀγὼ μὲν εὐγένειαν ἀποδείξω πόλει, / παίσας πρὸς ἧπαρ φασγάνῳ・σὲ δ' αὖ χρέων / ὅμοια πράσσειν τοῖς ἔμοις τολμήασιν.* 「そして私は肝臓に劔を突き刺して、町にその生まれの高貴さを示してやろう。あなたも私の勇氣ある振る舞いに同じことをしなければなりません」(1062-64)。ヘレナはトロイアではなくてエジプトの王の下にかくまわれているという設定ではじまる同じ作家の「ヘレネ」Helene で、彼女のところに夫であるメネラオスが訪ねてくる。そして妻がその地の王に求婚されていることを知って、彼はこれと対決しようと決意する。しかしもし王が力による対決を避けて、ヘレナもろとも彼を飢えで苦しめる積りならば、と彼は王の妹にいう。κτανεῖν δέδοκται τήνδε μοι κάπειτ' ἔμδν / πρὸς ἧπαρ ὄσαι δίστομον ξίφος τὸδε / τύμβου 'πὶ νώτοις τοῦδ', ἐν' αἵματος ῥοαί / τάφου καταστάζωσι・「私の考えは決っている。この女を殺し、ついでこの兩刃の劔を私の肝臓に突き刺す、この墓石の上で、そこには血の流れが墓から滴りおちるだろう」(982-85)。

先に「横隔膜の下の肝臓」という表現をみたが、面白いことに *ἥπαρ* と *φρένες* が並列して一つの概念のように扱われている例が、ソポクレスの「トラキスの女」*Trachiniai* にみられる。ヘラクレスの妻であるデアネイラは、嫉妬心から怪物ケンタウロスにそそのかされて、夫を毒殺する結果になってしまったが、彼女はそのことを嘆いて自殺をはかる。そのありさまを乳母が語る台詞に *κάν ῥ' τὸ κείσε δειρό τ' ἐφορμώμεθα, / δρώμεν αὐτὴν ἀμφιπλήγι φασγάνῳ / πλευρὰν ὑφ' ἥπαρ καὶ φρένας πεπληγμένην*。「ところが（お子さまを呼びに）急いであちらにいてもどってみると、あの方が両刃の劔をわき腹に、肝臓と横隔膜の下に突き刺してしまっていたのです」（929-31）。

さてこの *ἥπαρ καὶ φρένας* という結びついた表現がさらに進むと、我々の「心胆を寒からしめる」とか「肝を冷やす」「肝に銘ずる」という言葉にみられるような「心」と「肝臓」の一体感から、遂には「心の奥底」にある「肝臓」が「心臓」そのものにひとしく扱われることになる。例えば、ソポクレスの「アイアス」*Aias* において、この英雄の死を嘆く愛人テクメッサに対して、コロスの長はつぎのように述べている。*χωρεῖ πρὸς ἥπαρ, οἶδα, γενναία δόη*。「知っております。眞の悲しみは心の奥底 *ἥπαρ* にいたるものと」（937）。アイスキュロス *Aischylos* の「アガ멤ノン」*Agamemnon* のコロスのなかにも、これに似た言葉がみられる。*τὸ πᾶν δ' ἄφ' Ἑλλανος αἴας συνορμύνοις / πένθει' ἀτλησικάρδιος / δόμῳ 'ν ἐκάστου πρόπει · πολλὰ γοῶν / θιγγάνει πρὸς ἥπαρ*。「おしなべて、ギリシアの地より戦いにむかって出征した人々の、どの家にも、耐え難い悲しみが支配している。確かに多くのことが心の奥底にふれてくる」（429-32）。エウリピデスの「ヒッポリュトス」*Hippolytos* にも、この主人公の嘆きの言葉に同じ表現が使われている。*αἰαῖ, πρὸς ἥπαρ · δακρύων τ' ἐγγὺς τόδε, / εἰ δὴ κακὸς γε φαίνομαι, δοκῶ τέ σοι*。「ああ、心の奥底に（こたえる）。あなた（テセウス）にそう思われ、人々にも悪人のようにみえるところなら、これは涙なしにはいられない」（1070-71）。

アイスキュロスはその「供養する女たち」*Choephoroi* のなかで、母によって父を殺されたオレステスに、アポロン神が復讐を勧めるお告げを、つぎのように語らせている。*οὐ τοι προδώσει Λοξίου μεγασθενής / χρησμός κελεύων τόνδε κίνδυνον περᾶν / κάφορθιάζων πολλὰ καὶ δυσχειμέρους / ἄτας ὑφ' ἥπαρ θερμὸν ἐξαυδῶμενος, / εἰ μὴ μέτειμι τοῦ πατρὸς τοῦς*

*αίτιους / τρόπον τὸν αὐτὸν, ἀνταποκτεῖναι λέγων / ἀποχρημάτοισι
ζημίαις ταυροῦμενον.* 「この危険を乗り越えよと命ずるアポロン神の力強い
お告げは、決して裏切ることはないだろう。いく度も声高に叫び、そして咎め
によって財産を失って牛のように荒れているお前が、父を殺した罪ある者たち
を、同じ仕方でも殺し返せといい、もし私がそれに加わらなければ、この熱い心
の奥底に冬の嵐のような（冷たい）不幸の罰をあたえらるうとお告げになっ
ているのだ」（269-75）。ところでこの *ἔψ' ἤπαρ θερμόν* 「熱い心の奥底に」
に対して、同じ作者は「慈みの女神たち」Eumenidesにおいて、まったく同
じアポロン神の言葉を *καρδία* 「心臓、心」を使った台詞にまとめている。そ
のオレステスの言葉を引用すると、*καὶ τῶνδε κοινῇ Λοξίας μεταίτιος, /
ἄλλη προφωνῶν ἀντίκεντρα καρδία, / εἰ μὴ τι τῶνδ' ἔρξοιμι τοὺς
ἐπαιτίους.* 「そしてこれらのことにはアポロン神もともにかかわっているの
だ。もし私が（父の死に）かかわりのある罪ある者たちに対して、これら（復
讐）のことを少しでもしなければ、心に刺さる針のような苦痛を（あたえるぞ
と）お告げになっているのだから」（465-67）⁽⁷⁾。

同じ「慈みの女神たち」のはじめにはまた、息子のオレステスに殺された母
クリュタイムネストラが亡霊となってあらわれ、寝ている復讐の女神エリニュ
エス（のちに慈みの女神たちとなる）にむかって叫ぶ場面がある。*τί δρῶς;
ἀνίστω, μὴ σε νικάτω πόνος, / μηδ' ἀγνοήσης πῆμα μαλθαχθεῖο' ὑπνω ·
/ ἔλγησον ἤπαρ ἐνδίκους οὐείδεσιν.* 「なにをしているのか、起きなさい。
疲れに負けないように、眠りでやさしくなって、その身のうけた苦しみを忘れ
ないように。もっともな咎めの言葉に、心の奥底で痛みを感じるがよい」
(133-35)。この場合 *ἤπαρ* 「心の奥底」は、痛みを感じる場所である。そこで
他の作品をみると、同じ動詞 *ἀλγέω* を使った表現に、他の「心」をあらわす
名詞が用いられている。先にあげたエウリピデスの「オレステス」で、その母
クリュタイムネストラの父テュンダレオスは母殺しのオレステスのあまりの言
葉に立腹して、つぎのように述べている。*ἐπεὶ θρασυῆ κοῦχ ὑποστέλλη
λόγῳ, / οὐτῶ δ' ἀμείβη μ' ὥστε μ' ἀλγήσαι φρένα, / μᾶλλον μ' ἀνάξεις
ἐπὶ σὸν ἐξελεῖν φόνον.* 「お前はさげすげとものをいい、言葉に臆するところ
もなく、私が心 *φρένα* に痛みを感じるような答えをするので、いよいよお前
を死罪にしてやろうという気持ちに私をさせてしまうのだ」（607-9）。この用
例の *φρήν* は明らかに「心」だから、ここにも *ἤπαρ* と *φρήν* (pl. *φρένες*)

の交錯が認められる。この *ἥπαρ* の「心」への合流がさらに進むと、つぎのようなヘレニズム時代の表現が生まれる。そこでは *ἥπαρ* は *κραδίη*, つまり *καρδία* 「心 (臓)」とともに恋心の座となる。*λῆξον, Ἔρωσ, καρδίης τε καὶ ἥπατος· εἰ δ' ἐπιθυμῆς / βάλλειν, ἄλλο τί μου τῶν μελέων μετὰβα.* 「エロスよ、心や肝臓を射るのはやめて、もし射たいと思うのなら、私の身体のどこか別のところに変えてくれ」(「ギリシア詞華集」Anthologia Graeca 5,224)⁶⁸。

古代のギリシアをとりまく世界において、動物の犠牲は宗教的な儀礼に欠かせないものであった。印欧語族のヒッタイト帝國の人々の間では、とくに犠牲獣の心臓、肝臓、それに肩といった部分が神に捧げられた。これが心臓と肝臓の重要性を高めたことは事実だが、とりわけ肝臓が注目されたのは、メソポタミアを中心にセム系の人々からヒッタイト、さらには西に進んでエトルリア、ローマにまで浸透し、大いに珍重された *Leberschau*, 即ち、動物の肝臓、とくに羊の肝臓による占いである。古代社会ではさまざまな占いが行われ、専門の占い師がいたことはよく知られている。バビロン、アッシリアでは立ち上る煙とか、水のなかにいれた油とか、籤によって、戦いや病人の運命が占われた。またローマにみられるように、鳥占いも盛んであった。しかしこれと並んで犠牲獣の内臓による占いも行われ、心臓や肺、そして腸とか脾臓がそれに用いられた。なかでも重視されたのが、肝臓の表面の観察による占いである。これは、肝臓が感情の座であると考えられていたからであろう。この風習は、ドーナーナやデルポイの神話などが広く信じられていたギリシアではあまり表面化していないが、エトルリアの影響をうけた迷信好きのローマ人にはしっかりと受け継がれている。メソポタミアのマリ Mari, ヒッタイトではボガズケイ Bogazköy, エトルリアではピアチェンツァ Piacenza などから出土した数多くの粘土、あるいは青銅でつくられた肝臓の模型が、そのなよりの証據である。そのなかには文章も刻まれ、肝臓の各部分が図示されているものも多い。これは恐らく学習用につくられたものらしい⁶⁹。

その詳細な記述は筆者のよくするところではないが、専内書の教示によれば、古バビロンの時代には、犠牲の羊を殺す前に一定の質問がだされ、これを肝臓の各部分の特徴に照らし合わせて、イエスカノーで答が示されるという仕組みになっていた。そしてその大半は公的な生活とか遠征の見通し、就職など

に関するものであったが、ときには個人の家庭のこと、病人についても問われたようである。占いのたびに羊を殺すわけだから、この占いが主に王室や軍事などに用いられていたとしても、それは経済的に当然であろう。その検証はふつう肝臓の12の区分の様相の一つ一つについて行われ、可否のどちらが多いほうが結論とされたが、もし同数ならば、占いはくり返して試みられた。どういふ様相がよいのかについては、各部分についてのかかなり細かな所見があって、それに従っていろいろな答がだされたという。しかし時とともに生活も複雑になると、これに関するテキストがつくられ、条件文と歸結文という形式でとらえられるようになった。例えば、肝臓のナ na とよばれる部分に肉腫があったならば、病状について尋ねた病人は悪くなって死ぬだろうとか、胆嚢が長いと王は長生きするだろう、といった形式である。胆嚢が長くて細いのは、もっとも見分けやすい特徴であった。占いをしてもらいたい者は犠牲獣を神殿に連れていき、質問を粘土に書いて、お願いする神の像の下においておく。すると祭官の助手が動物を殺して、祭官の占い師が肝臓をとりだして調べ、占いを行った。

現在のトルコのアンカラ近く、ヒッタイト帝国の主都ハットゥシャの書庫のあったボガズケイからは36の肝臓の模型が発見されているが、その大半はアッカド語でしるされている。しかし歸結文がヒッタイト語で書かれているものが4片あるという。その実例をあげておこう。KUB 4 72 d (rev. top) (akkad.) *šumma rēš martim tituraam ša širim šakin-ma / me-ša uš-ta-ha-aq* (hitt.) *LÚ-aš ú-i-it-ti-mi-e-ia-ni / ar-ma-ni-ia-at-ta na-aš SIG₅ -at-ta / na-aš-šu-ma-aš-ta LÚ-aš ha-ad-ga-u-wa-az / pé-e-da-az iš-pa-ar-zi-zi* 「もし胆嚢の頭が肉の盛り上がりようになっていて、そしてそれに水が混じっているならば、この人はこの年のうちに病気になるだろうが、彼はよくなる。あるいはまたこの人は難しい状態から救われる」。KUB 37 223 (c) (akkad.) *BE KI. GUB ki-ma ŠU. GUR-ma GIŠ. TUKUL sa-hi-ir /* (hitt.) *A-NA LÚ^{LC}šar-di-aš e-di ne-a / URU. DIDLI pí-ip-pa-an-zi^{LC} KÚR LÚ-an / hu-ul-la-az-zi na-aš še-e-er-ši-i [t] / SIG₅-an-ta-ri-at ta [xxx]* 「manzāzu (肝臓の右側の一部) が輪のようで、GIŠ, TUKUL (“weapon(s)”) どの部分か不明) にかこまれているならば、その人の助人は彼方に去り、彼らは町々を倒し、敵はその人を敗り、そして彼はその人の上にあるだろう。彼らは安泰である」(Güterbock による)⁽¹⁰⁾。

ヒッタイト、さらにはメソポタミアとギリシアとは、先史時代からかなり密接な関係があったことは、神話の類型や Ahhiyawa 問題などからも明らかである。そこで我々が当面する肝臓占いについてみると、まず *ἥπατο-σκοπέω* (-σκοπία)「肝臓をみる (こと)」, あるいは *ἱερο-σκοπέομαι* (-σκοπία)「犠牲をみる (こと)」という形があるが、これらはいずれもヘレニズム時代以後のものである。ミュケーナイ時代からホメロスの叙事詩に、直接これを実証する用例はない⁽¹¹⁾。

しかしホメロスには *θυοσκοβος* という合成語がある。これは「犠牲をみる」祭官か占い師と考えられる。イリアス最終 24 巻で、トロイアの王プリアモスがわが子ヘクトルの屍体を引きとりにギリシア方の陣營を訪れようとするのを、妻ヘカベが不吉を感じてひき止めるのに対して、王が断固たる決意を語る一節に、つぎのような言葉がある。 *εἰ μὲν γάρ τις μ' ἄλλος ἐπιχθονίων ἐκέλευεν, / ἢ οἱ μάντιες εἰσι θυοσκοβοὶ ἢ ἱερεῖς, / ψεῦδος κεν φαίμεν καὶ νοσφιζοίμεθα μᾶλλον · / νῦν δ' αὐτὸς γὰρ ἄκουσα θεοῦ καὶ ἐσέδρακον ἄντην, / εἶμι, καὶ οὐχ ἄλιον ἔπος ἔσσειται.* 「なぜなら、この世の人間のどれかが (行くことを) 命じたのであれば、——それが予言者であれ、犠牲をみる者であれ、祭官であれ——我々もそれは偽りの言葉として遠ざかるだろう。ところが今や私は神の言葉をきき、そして眼前にその姿をみたので、私は行くのだ。その言葉を無にすることはしない」(24, 220-24)。ここでは *μάντιες*「予言者」とも *ἱερεῖς*「祭官」とも区別して *θυοσκοβοὶ* があげられていることに注目したい。オデュッセイアでは、オデュッセウスの留守にその妻ペネロペイアに求婚する者たちの一人で、彼らのための *θυοσκοβος* であったレオデスという男が、彼らの無法な振舞いを憎み、遂にはそれを理由にオデュッセウスに命乞いをしている (21, 145; 22, 318, 321)。この語はその後悲劇にいくつかの用例があるが、散文では忘れられ、ずっと後にラテン語の *haruspices*「(内臓) 占い師」の訳語として復活しているにすぎない。従ってこの詩語は積極的に肝臓占いを指示するものではないが、ホメロスのころに犠牲の臓腑を観察して占いをすることを職とする人々がいたことを示唆しているといえよう⁽¹²⁾。

古典期のギリシア世界では、具体的に肝臓とはいわないまでも、事に当って犠牲獣の内臓による占いが行われていたことは文献の記録するところである。例えば、歴史家ヘロドトス Herodotos はその「歴史」*Historiai* において、まず 2 巻のエジプトに関する記述 40 章以下で、犠牲式において牛や山羊の

「内臓をとりだして焼くこと」*ἡ εξαίρεσις τῶν ἰρῶν καὶ ἡ καθῆσις* に関してくわしく記述している。しかし占いについては、ふれていない。そこでギリシア人についての記録をみると、占いの事実が判明する。テルモピュライでペルシア軍と対峙したギリシア人には *πρῶτον μὲν ὁ μάντις Μεγιστίης ἐσιδὼν ἐς τὰ ἰρὰ ἔφρασε τὸν μέλλοντα ἕσσεσθαι ἕμα ἡοῖ σφι θάνατον, ἐπὶ δὲ καὶ αὐτόμολοι ἦσαν οἱ ἐξαγγείλαντες τῶν Περσέων τὴν περίοδον*。「まず占師メギスティアスが犠牲獣の臓腑を観察して、暁とともに死があるだろうと告げたが、さらには投降者で、ペルシア軍の迂回作戦を報じた者もいた」(7, 219)。第9巻では、マルドニウスの率いるペルシア軍の進攻に対して、アテナイの要請に答えたスパルタ軍はコリント地峡に兵を進め陣を張ると、他のペロポネソス諸國もこれに遅れをとってはならないと考えた。*ἐκ δὲ ὧν τοῦ Ἴσθμοῦ καλλιερησάντων [τῶν ἰρῶν] ἐπορεύοντο πάντες καὶ ἀπικνύονται ἐς Ἐλευσίνα· ποιήσαντες δὲ καὶ ἐνθαῦτα ἰρὰ, ὡς σφι ἐκαλλιέρεε, τὸ πρόσω ἐπορεύοντο, Ἀθηναῖοι δὲ ἕμα αὐτοῖσι, διαβάντες μὲν ἐκ Σαλαμῖνος, συμμιγνύντες δὲ ἐν Ἐλευσίνι*。「そこで犠牲の占いが吉とでたので、全軍が出発してエレウシスについた。ここでまた犠牲の占いをして吉兆をえたので進軍していったが、サラミスから渡来してエレウシスで合流したアテナイ軍も、彼らと行を共にした」(9, 19)。この例でみられる *καλλιέρω* (mid. *καλλιέρωμαι*) は、*κάλλι-*「美しい、よい」と *ιέρων* (adj. *ιέρως*「神聖な」)「(聖なる)犠牲」との合成を基にした「(犠牲の占いで)吉兆をえる (mid.) 吉とでる」をあらわす動詞である。この合成は、同じ作家のつぎのような表現に分析してあらわれている。これは、テイサメノスという「占師」(*ὁ θυόμενος* 9. 33., *θυομαι*「犠牲を捧げて神意を問う」)がスパルタ軍に同行していて、プラタイア地区でギリシア軍のために「武運を占った」*ἐμαντεύετο*, その結果を述べたものである。*τοῖσι μὲν νυν Ἑλλησι καλὰ ἐγένετο τὰ ἰρὰ ἀμνομένουσι, διαβάσι δὲ τὸν Ἀσωπὸν καὶ μάχης ἄρχουσι οὐ*。「ギリシア軍が守りにまわれれば犠牲の占いは吉、アソポス川を渡って戦闘をはじめれば凶であった」(9, 36)。この *καλὰ…τὰ ἰρὰ (…οὐ)* は *καλλιέρω* の源で、この占いが多用されていたことを示す有力な証拠といえよう⁽¹³⁾。

つぎにヘロドトスと並ぶ歴史家トゥキュディデス Thucydides の「歴史」*Historiai* からの一例を示そう。タナグラに集結したボイオティア軍の指揮官パコンダスは、アテナイの横暴を許さず、その軍勢と戦って雌雄を決しようとする

兵士たちを鼓舞する。その終の一節にいう。 ὦν χρῆ μνησθέντας ἡμᾶς τοὺς τε πρεσβυτέρους ὁμοιωθῆναι τοῖς πρὶν ἔργοις, τοὺς τε νεωτέρους πατέρων τῶν τότε ἀγαθῶν γενομένων παιδας πειρᾶσθαι μὴ αἰσχροῦναι τὰς προσηκούσας ἀρετὰς, πιστεύσαντας δὲ τῷ θεῷ πρὸς ἡμῶν ἕσσεσθαι, οὗ τὸ ἱερὸν ἀνόμως τευχίσαντες νέμονται, καὶ τοῖς ἱεροῖς ἅ ἡμῖν θυσαμένοις καλὰ φαίνεται, ὁμοίᾳ χωρῆσαι τοιοῦδε καὶ δεῖξαι ὅτι ὦν μὲν ἐφίενται πρὸς τοὺς μὴ ἀμυνομένους ἐπιόντες κτάσθων, οἷς δὲ γενναῖον τὴν τε αὐτῶν αἰεὶ ἐλευθεροῦν μάχην καὶ τὴν ἄλλων μὴ δουλοσθαι ἀδίκως, ἀνανταγώνιστοι ἀπ' αὐτῶν οὐκ ἀπίασιν。「これらのことを我々は思い出して、年長者は先の功績に劣らざらんことを願い、若き者は勇者であった父たちの子として、傳來の武勇の徳を恥づかしめないように努めなければならない。彼ら（敵）は不法にも神域に砦を築いて起居しているが、神は我らの側にあり、また我らの問うた犠牲の占いも吉とあらわれているの信じて、今こそ心を一つにして彼らにむかって突き進むべし。彼らが欲する地があって、守ろうとしない者たちのところには、攻めいってとればよい。だが自らの地については常に戦いによってその自由を守り、他國の地でも不当に奴隷とされないことを誇りとする者に戦いを挑む者あれば、反撃なしに去ることはできないということを示さなければならない」（4, 92, 7）。ここでも犠牲を捧げてその臟腑によって「神意を問うた我らに」 ἡμῖν θυσαμένοις 「占いは吉とあらわれている」（τὰ ἱερά） καλὰ φαίνεται と、ヘロドトスと同じ表現が認められる。もう一例を、クセノポン Xenophon の「アナバシス」 Anabasis から引用しよう。彼はメソポタミアで周辺の敵の攻撃に悩まされ、なかなかアルメニアの地に入れないでいたとき、自由な身で歩いている夢をみる。そこで指揮官ケイリソポスを訪ねて、その話をする。 ὁ δὲ ἡδετό τε καὶ ὡς τάχιστα ἕως ὑπέφαινον ἐθύοντο πάντες παρόντες οἱ στρατηγοί・καὶ τὰ ἱερά καλὰ ἦν εὐθὺς ἐπὶ τοῦ πρώτου。「彼は喜んで、朝日がさしはじめるやすぐに指揮官がそろって立ち会って犠牲により神意を問うた。そして最初の犠牲でたちまちその犠牲は吉であった」（4, 3, 9）。これらの用例から、犠牲による臟腑の占いのくわしい内容はわからないが、それが軍隊の行動の是非を問うのに必要な手段であったことがうかがわれる。ギリシア人は、メソポタミアやヒッタイト帝國のように宮廷をもたず、ポリスには王もいない。そして多くの大事を問うのは、デルポイなどの神話に委ねられている。先史時代から存在した予言者は、いちじるし

く権威を失っている。そうしたなかで、なお神意を問うべき場といえ、戦いである。しかもこれは緊急に答えが必要である。既述の用例は、そうした事情を反映している⁽¹⁴⁾。

肝臓の占いは小アジアとも交流があったと思われるエトルリアを経てローマに伝えられ、ヘレニズム時代になってギリシアに逆流していった。キケロ Marcus Tullius Cicero は「占いについて」De divinatione という一著を著して、神の啓示と人間の予言に関するさまざまな問題を論じている。divinatio “divination” とは quam Graeci *μαντικήν* appellant, id est praesensionem et scientiam rerum futurarum 「ギリシア人が *μαντική* とよぶもので、即ち、未来のことを予見し知ることである」(1, 1)。キケロの説明 (1, 117-18) によると、この宇宙には神が存在し、人事を支配しているから、そこに起ることについても神の啓示があると考えざるをえない。そしてその神の示す印しは、なんらかの方法で我々にも識別されるはずである。そこでキケロは、紀元前3世紀ころからギリシアに興隆したストア学派の説を引用する。nam non placet Stoicis singulis iecorum fissis aut avium cantibus interesse deum; neque enim decorum est nec dis dignum nec fieri ullo pacto potest. 「というのは、ストア学派の人々は、肝臓の一つ一つの割れ目とか鳥の歌に神がかかわりがあるとは認めない。なぜなら、それは神にとってその榮譽にふさわしくないし、またどうしてもふさわしくなるとは思えないからである」。彼は新プラトン学派の懐疑を旨とする哲学の徒として、いろいろな予言の方法をとり上げ、その信憑性を検証しようとする。そこでまず「内臓」exta の観察が問題になる。「占い師」haruspices がいうことはずっと観察した結果だとしても、quam longinquo tempore observari potuit? 「どれだけ長い時間観察できたというのだろうか」という疑問がある。そして彼はさらに續けてつぎのように述べている。aut quo modo est collatum inter ipsos, quae pars inimica, quae pars familiaris esset, quod fissum periculum, quod commodum aliquod ostenderet? an haec inter se haruspices Etrusci, Elii, Aegyptii, Poeni contulerunt? at id, praeterquam quod fieri non potuit, ne fingi quidem potest; alios enim alio more videmus exta interpretari, nec esse unam omnium disciplinam. 「(内臓の) どの部分が不吉で、どの部分が吉であるのか、(肝臓の) どの割れ目が危

険で、どれが有利なものを示しているのか、これらの点についてエトルリア、エリス、エジプト、カルタゴの占い師たちは相互に話し合いをしたのだろうか。そんなことは実際にありえなかったばかりか、想像することもできないのだ。なぜなら、我々のみるところ、それぞれが違ったやり方で内臓は説明され、すべてに一つの原則などはないからである」(2, 28)。ローマでは羊のみならず、鳥や牛の肝臓や肺臓も占いに用いられたらしく、ある牛の肝臓は軟らかでしっかりしているのに、他の牛のものは、固くてしぼんでいるとき、その条件や色からなにがいえようか、とキケロは疑問を述べ、内臓のなかのなにが自然に未来を示すことができるのだろうか、と率直に問うている(2, 30)。このようなキケロの言葉の裏には、当時のローマ社会において肝臓をふくむ各種の占いがかなり流行していたことがうかがわれる。そしてなかには彼にとってとうてい納得できないような予言を口にする者もいたに違いない⁽¹⁵⁾。

さてここで肝臓の占いが行われことを示す実例をあげておこう。紀元前 208 年のこと、カルタゴの勇将ハンニバルとローマの執政官 M.C. マルケルス Marcellus は、南イタリアのタレントゥム周辺ではげしく戦っていた。カルタゴの伏兵のために多くの兵士を失って後退したマルケルスは、兩軍の陣營の間にある森におおわれた丘を敵に先んじて占拠しようと考えた。そこで自分の息子をふくめた軍隊を先発させる前に、彼は犠牲を神に捧げてこれからの戦局を占った。et prima hostia caesa iocur sine capite inventum, in secunda omnia comparuisse quae adsolent, auctum etiam visum in capite; nec id sane haruspici placuisse quod, secundum trunca exta, nimis laeta apparuissent. 「そのとき最初の犠牲からは、頭（の隆起）のない肝臓がでてきたが、つぎのものではすべてが異常なしとみられたし、頭にはふくらみがみられた。整っていない、形の悪い内臓に続いて、あまりにも喜ばしいそれがあらわれたということは、占いをする者には本当に氣にいらなかった」(リヴィウス Titus Livius 「ローマ建國史」 Ab urbe condita, 27, 26, 13-14)。しかしマルケルスは戦意が高揚して敵の陣地が近くにあることに氣付かなかったために、命を落とすことになる。つまり、占いの予言がここでは的中したわけである。

カエサルの後を継いだアウグストゥス Augustus についても、スエトニウス Gaius Suetonius はその「ローマ皇帝傳」 De vita caesarum のこの皇帝の巻 95 節に、つぎのような逸話を書き残している。彼の身边にはいろいろと

不思議なことが起ったらしい。例えば、カエサルがある戦いのとき陣營の場所を選んで森林を伐採していると、棕櫚の木があったので、これを勝利の前兆として残しておかせた。するとこれに若い枝がまもなく生えてきて、親木に劣らないくらい急に成長した。このことに心を動かされたカエサルは、アウグストゥスを後継者にする決意を固めたという。さて当のアウグストゥスだが、*primo autem consulatu et augurium capienti duodecim se vultures ut Romulo ostenderunt et immolanti omnium victimarum iocinera replicata intrinsecus ab ima fibra paruerunt, nemine peritorum aliter coniectante quam laeta per haec et magna portendi*。『はじめて執政官の職について鳥占いの儀式をしていると、12羽の禿げ鷹がロムルスよのときのよように姿をみせた。まだ犠牲を捧げていると、すべての犠牲の肝臓がもっとも下の葉のところから内側に二重にまがっているのがみられた。老練な占い師たちはみな、これは喜ばしく、また大いなることを告げる兆しだというだけで、それ以外の推定を下さなかった』。この逸話のことが実際にどこで起ったかについては、大プリニウス Gaius Plinius がその「博物誌」*Naturalis historia* 11, 190 においてふれている。それはローマの北のスポレティウム Spolegium でのことで、アウグストゥスが6頭の犠牲の肝臓を使って占ったところ、そこに先に述べたような異常がみつきり、彼は一年のうちにその力を倍にすると予言された。そして事実、その占いの通りになったのである。

これまでにみたように、古代の印欧語族にとって「肝臓」は肉体的にも宗教的にも重要な器官であった。その重要性が、これをあらわす形の非常に古風な変化を支えたのであろう。その主な対応をあげると skr. *yákṛt-*, (gen.) *yaknás*, av. *yākarə*, gr. *ἥπαρ, ἥπατος* lat. *iecur* < *iequor-t (?), *iecinoris*, lith. *jėknos* で、インド、ギリシア、ラテン語の属格形は、主格の語幹 *r* に対して *n* をもつ典型的な中性の *heteroclitica* 異語幹曲用である⁽¹⁶⁾。

ラテン語の *iecinoris* という *iter* 「道」、*itineris* と同じ苦心の類推属格形をみても、この異常な語の傳統が容易に失われなかったことを示している。この対応の一つの問題点は、**yek***r-* と再建される母音の *e* の長短である。イランとギリシア語の形は、これが長いことを示唆している。もしこれを本来短い *e* とみれば、この兩派の *e* は、主格における延長段梯とみなされる。もう一つの問題は、これがゲルマン語の o. *norse. lifr*, *oe. liber* > *liber*, *ohg. lebara*

> Leber, それに arm, leard (gen, lerdi) を加えた対応と語源的に一つのものかどうかという疑問である。

はじめの e の長短については、確実に *ē/ə という母音交替が指摘できれば長母音が仮定されるから、弱階梯の形の有無が課題となる。そこで問題となるのは、Lat. (gen.) iocineris という形の母音 o である。この属格形はプラウトゥスでは非常に多い。これは、iter の属格 itineris 「道」が古い -n- 語幹の *itin-is を嫌って主格の -r- 語幹に合わせた類推形として一般化したのと同じように、iecur の -r- に倣って再構成された形であることは明らかである。その証拠に、同じ喜劇作家は *iecin-is を嫌った iocineris のほかに、iecoris という形を 10 回も用いている。またラテン語には iecineris という形も登場する。iocineris の母音 o は他の語派にみられないので、印欧語の名詞にあらわれる強階梯 e に対するゼロに代る弱階梯の o と解釈することも可能である。しかし *ē に対する弱階梯 ə の証明にはならない⁽¹⁷⁾。

たとえこのラテン語の属格の母音 o が祖語につながるものとしても、Burrow が主張する *ē/ə の ə > a に基づく lat *iacinis の反映とは考えにくい。また「キャヴィア」をあらわす russ, ikrá, o. russ, ikra, lith, ikrai, lett. ikri < *ikōr が、この「肝臓」と同一語源だとしても、この i が *yē-/yā->ya-, i- のあらわれとは考えられず、むしろ *yek^w- の弱階梯である *ik^w- から、より自然に導かれよう⁽¹⁸⁾。このラテン語の形以外は、バルト語派に e と並んで母音 a を示す (j) āknos があるが、これだけで長母音の弱階梯を説明することはむずかしく、やはり *yek^wṛ-t から出発すべきだろう⁽¹⁹⁾。

もう一つの問題は、ゲルマン語とアルメニア語の「肝臓」をあらわす形が、上掲のインド語派以下の対応に関係づけられるかということだが、これは音対応の上からは不可能である。この 2 つの語派の形は、共通して l- をもっている。また語中の子音も、*k^w- はアルメニア語では帯気音の k だから、leard はまったく合致しない。にも拘らず、この統一された「肝臓」を仮定しようとするのは、「肝臓」に対する古代人の言語的なタブーが、本来の *yek^wṛ-t を *lek^wṛ-t に変形したのではないかという、言語外の影響を想定しての推論である。またこれとは別に、本来の形を *lek^wṛ-t として、l-r の 2 つの流音の連続からの dissimilation によって *yek^wṛ-t を導きだそうとする解釈もある。さらに第 3 の仮定として、*lyek^wṛ-t を想定して、l- の消失を考慮するという説明もみられる。これらの解釈はどれも「肝臓」の対応を一つにまとめようとする

る立場から出発したもので、そのために無理な仮定をふまざるをえない⁽²⁰⁾。

ところが先に示したように、ヒッタイト語に *leši-*、あるいは *lišši-* と推定される中性の「肝臓」が指摘されたことによって、上記の *heteroclitica* 以外の対応の解釈は大きくみ直されるに至った。というのは、Schindler に従って *arm. leard* < **lihard* < **lisrt* とすれば、これと *Hitt. lišši-* < **liš-i-* は容易に関係づけられるからである。そしてゲルマン語派の形は旧説に従って *skr. répas-* 「よごれ」、*gr. λιπαρός* 「脂肪の、油で光る」、*λίπος* 「脂肪、油」、動詞形の *skr. limpāti* 「ぬりつける」、*gr. ἀλείφω* 「油をぬる」、*ocs. pri-līpēti* 「付着している」、*lith. līpti* 「はりつける」などとの対応を考慮すれば、その「肝臓」には本来 *λιπαρός* と同じ「脂肪の」という原意が推定されよう。そしてここにアルメニア、ヒッタイト語にゲルマン語の対応が加わった、形容詞から轉じた **lēip-*、**lēis-* という「肝臓」が想定される。その結果これと古い **yek*_r-t* と、2つの「肝臓」が祖語に存在したと考えられる⁽²¹⁾。

その他の「肝臓」としては、まずスラヴ語派の *cs. jętro* は、*skr. antár* 「内に」、*ántara-* 「内の」、*av. antarō*、*lat. inter* 「…の間に」、*interior* 「内の」、さらに *skr. āntara-*、*gr (n.pl.) ἔντερα* 「内臓」との関係から、その原意は明らかである。*russ. péčon'* (f) < *o. russ. pečeni* は、*lith. kēpenos* (pl.) 「肝臓」と *kėpti* 「焼く」との関係から、*russ. pec'* 「焼く」の派生形として、本来は「焼いた(肝臓)」であったに違いない。このように本来は「肝臓」の形容詞であったものが、「肝臓」そのものに轉じた例としては、上述のヒッタイト語などの「脂肪の(肝臓)」のほか、現在のロマンス諸語の *fr. foie*、*ital. fegato*、*sp. higado*、*rum. ficat* がある。これらの形は *lat. (iecur) ficatum*、つまり *ficus* 「いちじく」からつくられた「いちじくで太った肝臓」に源をもつもので、これはさらに *gr. (ἥπαρ) συκωτός (σῦκον* 「いちじく」) の *loan translation* にほかならない⁽²²⁾。

ケルト語派はまったく孤立した形をもっている。*o.ir. (f) óa*、*welsh (m) afu*、*bret. avu* である。その語源は明らかでないが、これとは別にアイルランドでは *tromchride* (pl. *truim*) 「重い心臓」(*cride* 「心臓」) という合成語が「肝臓」に代用された。これは本来は「軽い」をあらわす *scam* 「肺臓」に対比されたものである。またこのほかに、この言語の方言形には *cru-aidh* 「固い」が用いられるという⁽²³⁾。

肝臓に関連して、いくつかの臓器についてふれておこう。まず「腎臓」だが、旧訳のヘブライ世界では、腎臓は心臓とともにもっとも内的な、かくされたものとして、大きな悲しみとか、あこがれの座とされていたという⁽²⁴⁾。これに対して印欧語族では、そのような事実はみ当たらない。その用例は、インド語派については先に示した RV 10, 163, 3, AV 2, 33, 3 に、他の内臓の名稱と並べて言及されているが、そこで「腎臓」をあらわすとされる skr. *mátasna-* (*matasnu-* という形もある) という thematic の中性名詞はまったく孤立していて、語源も明らかでない。同じ skr. *vadh-*「うつ、殺す」の派生形 *vadhasná-*, *vadhasnu-*「凶器」から考えると、*mata-* の部分になにか動詞がふくまれているように思われるけれども、これに相当する語彙はわからない。

この不可解な形と並んで、インド語派にはヴェーダ時代の末期から *vṛkká-* という *k* の重複をもつ形が用いられ、パーリ語でも *vakka-* として生きている。そしてこの語派のなかでは *mátasna-* のほうは消失し、*vṛkká-* が「腎臓」のほかに「肝臓、内臓、心臓」など、言語によって意味はまちまちであるが、現代のインド・アーリア諸語にまで生き続けている。これに対応するイラン語派の av. *vərəδka-*、中期の khot. *bilga-*、それに現代の pers. *gurda* という形をみると、skr. *vṛkka-* には **vṛt-ka-* が予定される。またもう一つの、ヴェーダ文献に数例みられる *vṛkyau* (dual) にも **vṛtyau* が仮定される。この *vṛt-* は形の上からは *vartate*「向きを変える、回す」(lat. *verto*, goth. *wairþan*, germ. *werden* etc.) の対応と関係づけられるとすれば、これは本来は腎臓の丸みをおびた包みこむような形に因む名稱であったと考えられる。しかし一方ではブラーフマナ文献に *vṛkalá* (f) という、ある「内臓の部分」をさす形があり、これとの関連も無視できない、その意味では、このインド・イラン語派の形も語源的な分析はむずかしい⁽²⁵⁾。

これに対して gr. (pl.) *νεφροί* は o.norse *nýra*, me. *nēre*, (*kid-nēre* > *kidney*), ohg. *nioro* > *Niere* というゲルマン諸語の形 **neuran* との対応が可能である。またローマでは lat. (pl.) *rēnēs* (fr. *reins*, ital. *rene* etc.) に駆逐されたと思われる形で、gr. *νεφροί* に対応する語彙が Festus の語彙集に記録されている。それは Praeneste 方言の *nefrōnēs* と、Lanvium 方言の *nebrundinēs* である。Szemerényi によって、これらの対応を **negʷhro-* と再建すれば、先にあげた lat. *renes* もこの対応にふくまれる可能性がある。というのは、この再建形に *n-r-* > *r-n-* の *metathesis* を予想し、lat. *regno-*

> rēno がえられる。そこでこの o- 語幹の形が liēn「脾臓」の影響で, ren- という子音語幹に轉じたとみることができる。その証據に, この rēnēs には riēnēs という形も使われているからである。またこのギリシア・ラテン・ゲルマン諸派の対応には, さらにケルト語派の o.ir. āru, welsh arenu も加えられる⁽²⁶⁾。

この「腎臓」について, ギリシア人が残したいくつかの用例にふれておこう。ギリシアではこの器官が膀胱につながるものであることは, 早くから知られていた。プラトンは「ティマイオス」Timaios 対話篇の終りに近く, 病氣について語った後で, 太古に臆病な男が生まれ変わりとして女になったという説をだす。そこで神々は人間に生殖の欲望を促進したのだが, その過程をつぎのように述べている。τὴν τοῦ ποτοῦ διεξοδον, ἣ διὰ τοῦ πλεύμονος τὸ πῶμα ὑπὸ τοῦ νεφροῦ εἰς τὴν κύστιν ἐλθὼν καὶ τῷ πνεύματι θλιφθὲν συνεκπέμπει δεχομένη, συνέτρησαν εἰς τὸν ἐκ τῆς κεφαλῆς κατὰ τὸν αὐχένα καὶ διὰ τῆς ῥάχεως μυελὸν συμπεπηγότα, ὃν δὴ σπέρμα ἐν τοῖς πρόσθεν λόγος εἶπομεν。「飲物の通路だが, 飲んだものは肺を通して腎臓の下にいて膀胱に入るが, それ(膀胱)はうけいれておきながら呼気に圧されて, それを(呼気もろとも)送りだしてしまう, その通路に(神々は)穴をあけて, これを, 頭から頸を通して下にきて背骨を通して合成された髓に通じるように結びつけた。この髓とは先の話で我々が精子とよんだものであるが」(91a-b)。これが生命的な欲望になってエロスに発展していくわけである。

飲物が肺を通して腎臓にいくということは今では考えられない説だが, ギリシアでは医学書にも認められていたようである。それだけ πλεύμων「肺臓」と νεφροί は, 密接なものとしてとらえられていたのだろう。アリストパネス Aristophanes の喜劇「蛙」Batrachoi にも, つぎのような場面がある。これは英雄のヘラクレスに化けたディオニュソスが地獄に下りたったところで, そこでヘラクレスに恨みをもつ門番のアイアコスにさんざんに悪口をいわれる。地獄の川のアケロンの崖とか, コーキュトス川のはね廻る犬とか, ἐχιδῶνά θ' ἑκατογκέφαλος, ἦ τὰ σπλάγχνα σου / διασπαράξει, πλευμόνων τ' ἀνθάφεται / Γαρτηροσία μύραινα, τῷ νεφρῷ δέ σου / αὐτοῖσιν ἐντέροισιν ἡματωμένω / διασπᾶσονται Γοργόνες Τειθράσιαι, / ἐφ' ἃς ἐγὼ δρομαῖον ὀρμήσω πῶδα。「百の頭をもつ大蛇エキドナが, お前のはらわたを引き裂くぞ。タルテューソスの八つ目うなぎがその肺にかじりつき, お前の二つの腎臓を

臓腑もろともテイトラスのゴルゴンが血だらけにしてきり裂くぞ。このものどものところへ一走り，連れにいくとしよう」(473-78)。

この傾向はローマにも認められる。ホラティウスの「書簡」*Epistulae* 1, 6 には，つぎのように歌われている。si *latus aut renes morbo temptantur acuto*, / *quaere fugam morbi, vis recte vivere: quis non?* / *si virtus hoc una potest dare, fortis omissis / hoc age deliciis*. 「もし肺と腎臓が辛い病いにおそわれているのなら，病いの退散を求めるがよい。君は恙なく生きたいと思っている。だれがそうでない者がいよう。もし徳だけがこれをあたえることができるというのなら，快樂をすてて強くこの道をいくがよい」(28・31)。

ギリシアでは「腎臓」について面白い使い方がもう一つ残っている。この器官は膀胱に直結するので，これが *βουβών* 「鼠経部，股の付け根」の代用として，とくにその部分がふくらむ病をあらわす *βουβωνιάω* という動詞とともに用いられていることである。つまり，この用法は *νεφρώ* が「睾丸」の euphemism になることを示している。先に引用した「蛙」のなかで，悲劇作家エウリピデスが唱える詩句のなかにくり返しでてくる *κόπος* 「打撃」を皮肉って，ディオニュソスはいつている。*ὦ Ζεῦ βασιλεῦ, τὸ χρῆμα τῶν κόπων ὄσον. / ἐγὼ μὲν ὄν εἰς τὸ βαλανεῖον βούλομαι / ἢ πὸ τῶν κόπων γὰρ τῶ νεφρῶ βουβωνιάω*. 「おおゼウス大王よ，この *kopos* のすごいこと，どれほどになるのやら，俺は風呂やにいきたいよ，こう打たれては腎臓がはれ上ってしまうからな」(1278-80)。同じ作家の「女の平和」*Lysistrate* では，戦いに明け暮れる亭主たちをこらしめるためにセックスのストライキを行う奥方たちが主役だが，やっと奥方をつかまえたのに巧く逃げられたキネシアスにむかって，男のコロスがつぎのようにいつている。*κἄγω γ' οἰκτίρω σ' αἰαί. / ποῖος γὰρ νέφρος ἄν ἀντίσχοι, / ποῖα ψυχῆ, ποῖοι δ' ὄρχεις, / ποῖα δ' ὄσφύς, ποῖος δ' ὄρρος / κατατεινόμενος, / καὶ μὴ βινῶν τοῦς ὄρθρους*; 「私も氣の毒に思うよ，ああ。どんな腎臓が，どんな魂が，どんな金玉が，どんな腰が，どんなお尻が耐えられようか，苦しめられて，その上明け方にやらずにいるなんて」(961-66)⁽²⁷⁾。

スラヴ語派の「腎臓」は o.russ. *počika*, russ. *póčka* だが，これは「芽」をあらわす形と同じである。語源的にはこの言語の *péčen'* 「肝臓」と同じく，*pec'* 「焼く」の派生が考えられる。これは先にふれたように，犠牲に捧げる腎臓に因んだ形容詞の名詞化であろうか。しかしこの形より古いのが ocs.

(n.pl.) istesa, o. russ. isto, russ. ísto である。これはバルト語派の lith. inkstas, lett. iksts のほかにゲルマン語の o. norske eista 「睾丸」と関係づけられている。これらは形式的に *id-s-to と分析されるから、語根 *oid- 「はれる、ふくれる」(gr. *oldéō, oldáō*, arm *aytnum* etc.) が予想される。その場合「はれている」という名称は、「腎臓」の病的な一面に因むものであろう⁽²⁸⁾。

つぎに「肺臓」について考えてみよう。この臓器をあらわす形は言語によってかなり違っているが、それでも印欧語族がこれについて2つのとらえ方をしていたことがうかがわれる。

その一つは、「肺」が肝臓などより軽くて水に浮くという事実に因んだ命名である。その典型的なものは gr. *πλέμων*, (pl.) *πλέμονες* である。この形はホメロス以来のものであるが、古典期の劇には *πνεσμα* 「呼気」との連想から *πνέμων* という形も登場し、こちらがそのまま近代に至っている。プラトンは「ティマイオス」84d で、*ὁ τῶν πνευμάτων τῷ σώματι ταμίης πλέμων* 「身体に呼気を供給するものが肺である」といっている。このように「肺」が「呼気」に結びつけられたのは、単に形が類似しているというよりも、その派生がはっきりしなかったからであろう。ところがこの *πλέω*- は、形の上からは gr. *πλέω* 「航海する」、*πλόος* 「航海」、あるいは *πλέω* と同意の ocs. *plovō*、さらには skr. *plávate* 「浮く、泳ぐ」、*plavá-* 「小船」、lith. *plaúti* 「浮く、すすぐ」、Toch. (B) *plewe* 「海」などの対応の基礎となる語根 *pleu- 「浮く、泳ぐ」に関係することは疑いない。それではなぜ「肺」がこの語根の派生形となるのかが問題となる。それは古代人の知恵である。彼らは犠牲に捧げた動物を食べるために、その内臓を屠殺後に水をはった器に入れて洗ったりした。ところが水にいれると、「肺臓」は「浮いたまま」で、心臓や肝臓のように沈まない。そこで gr. *πλέμων* という形が生まれたのである。

ラテン語の *pulmō*, (gen.) *pulmōnis* は現代の fr. *poumon*, ital. *pulmone*, sp. *pulmon* の源だが、これが既述の *πλέμων* と同じ語源にさかのぼるか、あるいはその借用語かは説がわかれている。いずれにしても、-l(e)u- でなくて -ul- をどのように解釈するかが問題である。また skr. *kломán-*, pali *kilomaka-* も、もしギリシア語との対応を認めるとすれば、*p-m- > k-m の変化を予定しなければならない。ある熱病の名前である skr. *takmán-* は、

本来は身体の「熱力」をあらわす *tápas-* から考えて **tap-man-* に由来するとしたら、これらの *p > k* の変化は一種の *dissimilation* とみるべきであろうか。このギリシアとインド兩派の「肺臓」は、接尾辞の一致からも同一語源とみてよいだろう⁽²⁹⁾。

バルト、スラヴ語派にも lith. (pl.) *plaūciai*, o. pruss. *plauti*, ocs. (n.pl.) *plušta*, o. russ. *pljuča*, russ *pljuče* のように、同じ語根 **pleu-* からつくられた「肺臓」が認められる⁽³⁰⁾。またインドに接するイラン語派の古い資料は、後述するようにインド語派とは異なる形をもっているが、もっとも西に位置する現代のオセツ後には *ræuæg*, *ruog* という形が「軽い、不安定な」という形容詞と「肺臓」を兼ねている。このオセツ語の形は **fravaka-* に基づくもので、既述の skr. *plávate* 「浮く、泳ぐ」と対応する Ar. *fra-fravaite* 「めまいがする」と同じ語根の名詞形である。これらの広い対応の分布からみて、この水に「浮くもの」としての「肺」は、印欧祖語にまでさかのぼるものと考えられる⁽³¹⁾。

さてこの「軽い」という形容詞が「肺臓」に用いられるのは、先に述べたようにこれが水に浮くということに関連している。この転用は印欧語のいくつかの語派に認められる。スラヴ語の o. russ *legkoje*, russ. *lëgkoe* は *lëgkij* 「軽い」の中性形であり、英語の *lights*, ポルトガル語の *leves* (adj. *leve* < lat. *levis*) も同様である。o. ir. *scam*, *scaman*, welsh *isgafn* も「軽い」を兼ねている⁽³²⁾。

またゲルマン語の英独語の *lung*, *lunge* も、さかのぼれば oe. *lungen*, ohg. *lungen*, さらに o. Norse *lunga* があるが、その対応を探ると **(ə) lŋʰ hú-* > skr. *laghú-*, *raghú-* 「速い、軽い」、gr. *ελαχύς* 「小さい」、さらに lat. *levis*, lith. *leŋgvas*, ocs. *līgükū*, goth. *leihts* 「軽い」、o. ir. (comp.) *laigiú* 「より小さい」との関係は明らかであり、ここでも「肺」が「軽い」ものとしてとらえられていたことがわかる⁽³³⁾。

これまで述べたような水に「浮く」「軽い」肺とはまったく別に、擬音的な性格をもった「肺」の語彙がいくつかの語派に散在している。例えば、古代インドの医学書にみられる skr. *phupphusa-* (m), *phupphusa-* (n) は、はあはあと激しく息をしている状態をあらわす擬音語である。hitt. *hahri-* (akkad *hašū-*) も *h* の重複からみて、その成立には同じような過程が予想される⁽³⁴⁾。一見これに類する形として、イラン語派の av. *suš-*, (f. du.) *suši-*

がある。これは khot. *suvä* をはじめとして、中期ペルシア語を通して近代 *šuš* に至るこの語派の「肺臓」であるが、不思議にインド語派にこれと対応するかと思われる **śuṣi-*「呼氣」という形があったらしく、近代語にその痕跡が残っている。またこの語派には *śuṣi-*「くぼみ、穴」という形があり、skr. *śvāsiti*「息を吹く」 < **k̥wes-* と関係づけられているから、av. *suš-* もこれに属する可能性がある⁽³⁶⁾。

《注》

- (1) 拙著「ことばの身体誌」東京 1990, 190f.
- (2) 古典期には同じ (m) *yakṣman-*「病氣」が一般的である。それについては J. Filliozat: *La doctrine classique de la médecine indienne*, Paris 1949, 80-89 にくわしい。なおヴェーダ時代の解剖の知識については同書 117-137.
- (3) 例えばアタルヴァ・ヴェーダ (AV) 9, 7, 9-12. これは雄牛について「その腰はバラモンと王族、その股は軍隊、…その心臓は心、肝臓は知慧…」と歌われている。
- (4) その器官はまず *nāhhis*, *hṛdayam*, *kloma*, *yakṛt*, *plihā*, *vṛkkau*, *bastis*「へそ、心臓、肺臓、肝臓、脾臓、腎臓、膀胱」だが、これ以下の腸の区分を示す語は専門用語らしく意味が不明確のものもある。P.Sharma のテキスト (Varanasi 1981) と訳によると *purīṣādhāras*「盲腸」(*purīṣādhānas*「直腸」の誤りか、*pliṣa-*は「糞」)、*āmāśayas*「胃」、*pakvāśayas*「空腸」(BW では「Unterleib」)、*uttaragudam*「直腸」(直訳は「上腸」)、*adharagudam*「肛門」(直訳は「下腸」)、*kṣudrāntram*「小腸」、*sthūlāntram*「大腸」、*vapāvahanam*「網膜」(*vapā*だけでもこの意味)。
- (5) 古代インドにも多くの呪法や迷信があったことは、アタルヴァ・ヴェーダをみても明らかである。スッタニパータにもつぎのような教えがある。*Āthabāṇaṃ supinaṃ lakkhaṇam / no vidahe atho pi nakkhattam, / virutaṅ ca gabbhakaraṇam, / tikiccham māmako na seveyya. //*「魔法、夢占い、相占い、さらにまた星占いを行ってはならない。鳥獣の声の占い、懐妊術、医術に、わが信徒は従事してはならない」(927)。

これまであげた内臓の名稱の羅列は、インド以外にはあまりみられないが、ラテン文学につぎのような例がある。これはプラウトゥス Plautus の喜劇「クルクリオ」Curculio の 236 行以下で、奴隷に、どうしましたと尋ねられた遊女屋の主人が答える台詞に、*lien enicat, renes dolent, / pulmones distrahuntur, cruciatur icur, / radices cordis pereunt, hiraes omes dolent.*「脾臓がきりきりと痛む。腎臓もよくない。肺がこわれそうだ。肝臓がしぼられるようだ。心臓の線がだめになる。腸ぜんたいがよくない」。これに対して奴隷はすかさず医者を真似て、*tum te igitur morbus agitat hepaticarius.*「ではあなたは肝臓病にかかっているのだ」といっている。ここに使われている *hepaticarius*「肝臓の」という形容詞は、lat. *icur*「肝臓」ではなくて、同じ意味の gr. *ἥπαρ* (gen. *ἥπατος*) の派生形である。これは当時のローマでの医学にギリシア語が使われていたことを示している。

- (6) *πραπίδες, φρένες* (sq. *φρήν*) とともに印欧語としての確実な対応に乏しく、その語源は明らかでない。前者については S. D. Sullivan: *πραπίδες* in Homer, Glotta 65, 1987, 182-93。この論文で著者は両語について、Both seem best described as entities located somewhere in the chest region. But even though they are similarly located, they may be distinct in nature. (p.191) と述べるに留まっている。後者については、S. Ireland and F. L. D. Steel: *Φρένες* as an anatomical Organ in the Works of Homer, Glotta 53, 1975, 183-95, そして前掲 *πραπίδες* の論文の著者による An Analysis of *φρένες* in the Greek Lyric Poets (excluding Pindar and Bacchylides), Glotta 66, 1988, 26-62 があるが「肝臓」との関係については特別な指摘はない。*Φρένες* 「横隔膜」の機能についてはアリストテレス Aristoteles 「動物の諸部分について」 *Peri zōiōn moriōn* 672 b 10 以下に詳しい記述がある。
- (7) Aeschylus Choephoroi, with introduction and commentary by A. F. Garvie, Oxford 1986, 112。なお *ἥπαρ* の *καρδία* への接近について、Budé 版 Choephoroi, Paris 1955 の校訂者である P. Mazon は、90 頁の注に、古代人にとって la foie était le siège “d'une partie de l'âme” と述べ、注 (6) にあつたアリストテレスの著作の 676 b 24 をあげている。その原文は τῆς ψυχῆς τὸ περὶ τὸ ἥπαρ μῦθιον だが、この部分はプラトン Platon の「ティマイオス」 Timaios 71 d の説を掲示したにすぎない。アリストテレスは 670a で、*ἥπαρ* と *καρδία* はすべての動物に「不可欠のもの」 *ἀναγκαῖα* と述べ、解剖学的に重なり合うところがあるとは考えていない。
- (8) 既述のような、ソポクレスの「トラキスの女」931 行の *ὄψ' ἥπαρ καὶ φρένας* という表現は、胸の下の急所をこの 2 語に割ってあらわしたものである。因みに、これに似た表現は、ヒッタイト語文献にも認められる。戦前に F. Sommer - A. Falkenstein によって付けにされた、ヒッタイト語とアッカド語の両言語で書かれたハットゥシリ Hattušili 一世の遺書のなかに、つぎのようなシュメル語表記の語をふくむ一節がある: Die hethitisch-akkadische Bilingue des Hattušili I. (Labarna II), München 1938, 8-9, 78-83。これは王が、息子ムルシリ Mursili が即位したら、彼を助けて一族が一つになって不和を起さないようにと述べた後での言葉である (一部表記を簡略化) Kol. II 48 nu-uš-ma-aš I UZU NÍG. GIG I UZU ha-ah-ri-iš I UZU GEŠTU-ša ha-an-ta-an-te-oš 「そこで汝らには一つの NÍG. GIG, 一つの心, 一つの耳 (理解) が整う」。名詞の前につけられた UZU は身体名稱のサインであり、「心」と訳した hahri- は本来は「肺臓」、あるいは「横隔膜」をあらわす中性名詞だから、ギリシア語の *φρήν* に相当する。そこで NÍG. GIG を Sommer は Herz と訳しながらも、他の文献においてこの語が UZU ŠĀ 「心臓」と併置されていること、またこれを心臓とともに焼いて細かく切ってパンにのせて神に捧げる、などの記述から、「肝臓」の意味が想定できるとしている。この Sommer の推定が正しければ、これはソポクレスの *ἥπαρ καὶ φρένες* に一致する表現である。

なお宗教的な文献の用例としては、A. Goetze が校訂した Tunnani の名でよばれる老いたる巫子の言葉による儀礼の書に、ヒッタイト語の *leši-* 「肝臓」がシュメル語の UZU ŠĀ 「心臓」と併記されている例がある。これはある人の穢れを払う儀礼であるが、その準備のために老女が整えるものリストで、粘土でつくった牛などの像, *tepu* 「少量」の赤や青の羊毛, 鷲の翼, 骨, いちぢく, 一口

のパンなどととも、tepu^{UZUŠA} tepu leši があげられている。このテキスト (I 48) では「心臓」の部分は欠けていて補われているが、Goetzeによれば、lissi-, lesi-「肝臓」との連続には数例の裏付けがある。ここにもこの2つの器官の強い結びつきをうかがうことができる。A. Goetze: *The Hittite Ritual of Tunnawi*, New Haven 1938, 8-9, 71 f.

- (9) A. Goetze: *Kulturgeschichte Kleinasien*, 2. Auflage, München 1957, 149, 164; J. Thorwald: *Macht und Geheimnis der frühen Ärzte*, München-Zürich 1962 150f.; W. Keller: *Denn sie entzündeten das Licht*, *Geschichte der Etrusker*, München-Zürich 1974, 86, 93f.; A. Kammenhuber: *Träume und Vorzeichenschau bei den Hethitern*, Heidelberg 1976, 70, 72, 110; G. Wilhelm: *Grundzüge der Geschichte und Kultur der Hurriter*, Darmstadt 1982, 95; W. v. Soden: *Einführung in die Altorientalistik*, Darmstadt 1985, 146f. とくにメソポタミアの肝臓占いについては、A. L. Oppenheim: *Ancient Mesopotamia*, Chicago 1964 213-15; *Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*, Bd. 6, Berlin 1980-83, *Leberschau* の項; 中岡一郎: マリ文書にみられる内臓占いについて, *中央大学紀要史学科* 24号 1979, 1-43; M. ローウェ, C. ブラッカー (編): *占いと神話*, 東京 1984, 181-87. なお肝臓の寫眞, 図版は上掲 Goetze, Thorwald, *Reallexikon* に掲載されている。
- (10) H. G. Güterbock: *Hittite Liver Models, Language, Literature, and History: Philological and Historical Studies presented to E. Reiner*, ed. by F. Rochberg-Halton, New Haven 1987, 147-153; E. Neu: *Interpretation der hethitischen mediopassiven Verbalformen*, Wiesbaden 1968, 14.
- (11) P. Faure: *La vie quotidienne en Grèce au temps de la guerre de Troie 1250 av. J.-C.*, Paris 1975, 106によると、Pylos文書 (PY Eb 317) に i-je-re-ja (= *ίέρεια*) 「女祭司」と並んであげられている we-te-re-u, さらに同じ Eb 294 に e-ri-ta i-je-re-ja (= *Ἐριθα ίέρεια* 「女祭司エリタ」) と平行してあげられている o-pe-te-re-u qe-ja-me-no の opetereu の 2 語について、“haruspice” “devin” を推察する説に依って占いの事実を認めようとしているが、この解釈は疑問である。C. J. Ruijgh: *Études sur la grammaire et le vocabulaire du grec mycénien*, Amsterdam 1967, 301, 376.
- (12) M. P. Nilsson: *Geschichte der griechischen Religion*, Bd. I, München 1967, 167. *θυο-σκόος* の後分 *-σκόος* は語源的には *skowo-, OHG, scouwōn > schauen と関係し、また s- のない *κοίω* 「氣付く, きく」, Lat. caveo 「用心する」, さらに skr. kavī- 「詩人, 賢者」もこれに属する。しかしギリシア語では *-σκόος* の使用はこの合成語だけしかない。因みに、ローマ時代には、これと同じ意味で *λερο-σκοπία* のように lat, speciō 「みる」と同源の *-σκοπ-* を使った名詞 (-動詞 *λεροσκοπιόμαι*) がつくられている。従ってこの *skowo- は孤立しているが、ミケーナイ時代には、これをふくむ形として e-pi-ko-wo (Py An 657) がある。この *ἐπικοφοί* の意味を L. R. Palmer (*The Interpretation of Mycenaean Greek Texts*, Oxford 1963, 147, 151, 417) は “watchers” としている。これに対して F. Bader (*Vocabulaire et idéologie tripartite des indo-européens: La racine * swer- «veiller sur» en grec*, BSL 66, 1971, 139-211 の 149) は, *πυρκοί* 「前兆をひきだすために (デルポイで) 聖火を見

まもる人」という5世紀のヘシキオス Hesychios の語彙集に記録されている形に比定して “devins qui surveillent (les entrailles) par le feu” という意味を提示している。臓腑占いを示唆する解釈として興味深い。

θυοσκοδος とは別に、ギリシア人の肝臓占いを象徴するかの如き神話として、K. ケレーニイ Kerényi はプロメテウスの苦難の物語をあげている（「プロメテウス」東京1972, 67）。人間に火をあたえたティタン族のプロメテウスがゼウスの怒りをかい、カウカソスの山に鎖でつながれ、ゼウスの使いである大鷲が血に飢えて日の出とともにあらわれ、彼の肝臓を食べるのだが、肝臓は夜のうちに再び生長する。これは黒々とした肝臓が夜空にある世界の姿を宿しているからで、この臓器は暗い夜に通じる。アイスキュロスがみごとに劇化したこの神話は、ギリシア人も肝臓占いを行っていたことを物語っているというケレーニイの見解は注目に値する。

- (13) この *καλλι-* という前分の *-λλ-* は、*καλλος* (n) 「美しさ」と同じだが、adj. *καλός* を考慮すると説明しにくい。**kal-wo-*, *-ne-*, *-yo-* などの可能性について H. Frisk: *Griechisches etymologisches Wörterbuch*, Bd.1, Heidelberg 1960, 767。
- (14) 古典期における予言者への不信は、文学にもはっきりあらわれている。これについては、註(9)にあげたローウェ・ブラッカー「占いと神話」131-33。
- (15) 占いか予言に対する不信は、ローマでも早くから指摘されている。例えば、大カトー Marcus Porcius Cato はその「農業について」*De agricultura* の監督者の守るべき事項のなかに、つぎのように述べている。haruspicem, augurem, hariolum, chaldaeum ne quem consuluisse velit, 「内臓占い師、鳥占い師、予言者、占星術師にはだれであれ相談しようとするな」(7, 4 Heimeran 版)。カトーより遅れて1世紀にコルメラ Lucius Junius Moderatus Columella も「農耕について」*De re rustica* という著作を残しているが、そこでも「占い師と女易者」haruspices sagasque は無知な人の心を誤った迷信で浪費させ、恥づかしい行いをさせてしまう輩だから、監督者は近づけてはならないと慎しめている(1, 8, 6)。因みに、ケケロは「占いについて」のなかでカトーの皮肉な談話を傳えている(2, 51-52)。それは、おかしなことに占い師は他の占い師にあっても笑わない、という話である。ケケロはそれに續けて、ハンニバルやカエサルが「臓腑が禁じています」という占い師の言葉を無視して行動したおかげで成功した例をあげて、不信感をあらわにしている。M. Beard and J. North (ed.): *Pagan Priests*, London 1990, 49-71 に収録の J. North: *Diviners and Divination at Rome*。とくにエトルリアの肝臓占いの方法については Pauly-Wissosa Bd. 7, 2432-68 Haruspices の項の 2451 以下にくわしい。

なおこの haruspex という語は、extispex 「内臓 exta をみる speciō (人)」のほかに fulguriator, fulgurator 「電光 fulgur による占い師」にも用いられる一種の職業語だが、この前分の haru- は古語である hariolus, hariolor 「予言者」の hari- と共通する。印欧語の対応としては gr. χορός 「腸」、skr hirá 「血管」、lith. žárna 「腸」、ohg. garn などあげられ、ラテン語の hira 「腸」、hirnea 「ヘルニア」も同源の可能性が認められている。ところが早くにこの haru- は、シュメル語の HAR- 「肝臓」(= akk. kabittu) との関係が予想されたが、学界はこぞってこれに否定的であった。しかし戦後になってこ

の点に関するエトルリアとバビロンの関係がみ直され、改めてこの古い説がよみがえっているという。エトルリアはこうした占いを職とする者を養成する団体までもっていたのだから、この語も本来はその技術とともにローマにもちこまれた可能性は高い。新しい進展が期待される。A. Ernout-A. Meillet: *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, 3. éd., Paris 1951, 290.

- (16) この対応にはイラン語派の av. huyāyana- という Yt. 210, 116 にみられる合成語の後分が加えられる可能性がある。この形についてはいろいろな解釈がだされているが、W. Krause は, *Iranica*, *kZ* 56 1928-29, 288-308 の 304 以下において、これを skr. *sá-garbhya-*「同腹の、はらから」(*gárbha-*「子宮」), gr. *ἀ-δελφός*「兄弟」のような合成語と同類とみて、hu-「ともに」, *yāyana-*は skr. *yákr-* などと同じ要素と分析して、「兄弟」の意味を想定した。これは一部の学者にうけ入れられているが、「ともに」は av. *ha-* (skr. *sa-*) であり、*k > γ* の変化も認められない。従ってこの Krause の解釈は否定されなければならない。J. Gershevitch: *The Avestan Hymn to Mithra*, Cambridge 1967, 267; 拙著「印欧語の親族名稱の研究」東京 1984, 82f., 371.
- (17) *o* を *e* の弱階梯とするのは H. Rix: *Lat. iecur, iocineris*, *Mss* 18 1965, 79-92。これをラテン語内部のものとする説としては O. Szemerényi: *Rekonstruktion in der indogermanischen Flexion, Prinzipien und Probleme, Flexion und Wortbildung, Akten der 5. Fachtagung der idg. Gesellschaft*, Wiesbaden 1975, 325-45 の 332. *iecur* の属格形については A. Ernout: *Aspects du vocabulaire latin*, Paris 1954, 126f. Rix, Szemerényi ともこの形には長でなく短母音 *e* を仮定している。
- (18) T. Burrow: *The Problem of Shwa in Sanskrit*, Oxford 1979, 65。ただし Burrow はなぜか *iocineris* にはふれず、**iacinis* に代る **iecinis* > *iecin-or-is* を属格形としている。
- (19) E. Schwyzler: *Griechische Grammatik* 1, 2. Auflage, München 1953, 356。明らかに長い母音をもつ gr. *ἦπαρ* のそれについては、延長階梯とみる代りに、「心」をあらわす *ἦτορ, κῆρ* の *ē* の影響とみる説もある。(17) にあげた Szemerényi の論文 333f.。
- (20) E. Benveniste: *Origines de la formation des noms en indo-européen*, Paris 1935, 8f., 26, 182, **lyek***ṛ-t* の仮定。この再建形から理論的に導かれる交替形 **leik*-「残す、委ねる」という語根との関係から、「肝臓」は「organe laissé, abandonné (aux dieux), celui qu'on laisse de côté en dépeçant la victime」という解釈がでてくる; G. R. Solta: *Die Stellung des Armenischen im Kreise der idg. Sprachen*, Wien 1960, 157f. アルメニア語の対応を認める; R. Schmitt: *Grammatik des klassisch-Armenischen mit sprachvergleichenden Erläuterungen*, Innsbruck. 1981. 77 アルメニア語の対応は疑問とする。なおロシア語 *ikra* etc. については M. Vasmer: *Russisches etymologisches Wörterbuch*, Bd.1, Heidelberg 1976, 477.
- (21) J. Schindler: *Hethitisch lišši "Leber"*, *Sprache* 12 1966, 77-78。ここでは Hitt. *lišši-* に **liš-s-i*, または **lē* (i) *s-i*, arm. *leard* に **liš-rt*, または *lē* (i) *s-rt* を仮定している。その後この解釈には讃否両論がある。J. Tischler: *Hethitisches etymologisches Glossar*, L-M, Innsbruck 1990, 54-55.
- (22) 註 (20) にあげた M. Vasmer Bd. 2 1955, 352; 拙著「ことばの生活誌」東京

- 1987, 100f.
- (23) tromchride という合成語でなく、trom, tromm「重い」だけでも「肝臓」をあらわす。また接尾辞を伴った trommān という形もある。J. Vendryes: *Lexique etymologique de l'irlandais ancien*, MNOP, Paris 1960, 0-2, T-U, Paris 1978, T-149-51。この「肝臓」を「重い」で表現するのは、アッカド語の kabittu も同じである。註(8)にあげた Sommer-Falkenstein 82。これは水に浮く「軽い」肺臓に対比されたものである。アルバニア語には mëlci という形が記録されているが、e zezë「黒い」に対して (mëlci) e bardhë「白い」は「肺臓」である。なおトカラ語の「肝臓」は不明。またヒッタイト語には tahalai- という形が既述の lesi- lišši- のほかに「肝臓」として記録されているが、これは原ハッティ Hatti 語に属する語彙のようである。註(21)にあげた J. Tischler T, D, 1991, 11。
- (24) 聖書大事典 東京 1985, 635。
- (25) インド・イラン語派の形については J: Wackernagel (-A. Debrunner): *Altindische Grammatik*, Bd 1, Göttingen 1896, 135 §117a, Bd. 2/2 1954, 218 §115bA, 534 §366A; M. Mayrhofer: *Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch*, Bd. 3, Heidelberg 1976, 241f., *ib. Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen* Bd. 2, 1992-, 571f.; H. W. Bailey: *Dictionary of Khotan Saka*, Cambridge 1979, 289。
- (26) O. Szemerényi: *Principles of etymological research in the Indo-European languages*, 2. Fachtagung für idg, und allgemeine Sprachwissenschaft, Innsbruck 1962, 175-212 の 193f.; 註(23)にあげた Vendryes A-92。
- (27) Aristiophanes Frogs, ed. with introduction and commentary by K. Dover, Oxford 1993, 254, 347; Aristophanes *Lysistrata*. ed. with introduction and commentary by J. Henderson, Oxford 1987, 183。
- (28) 註(25)にあげた Vasmer Bd. 1, 490; J de Vries: *Altnordisches etymologisches Wörterbuch*, 2. Auflage, Leiden, 1977, 98。なお alb. veshkë, arm. erank' がみられるが語源不明。ヒッタイト、トカラ語の形は不明。
- (29) 註(25)にあげた Mayrhofer *Ety. Wb.* Bd. 1, 419; K. Hoffmann: *Aufsätze zur Indoiranistik*, Wiesbaden 1975, 514。
- (30) 註(20)にあげた Vasmer Bd. 2, 378。
- (31) E. Benveniste: *Études sur la langue ossète*, Paris 1959, 41。註(25)にあげた Mayrhofer *Kurz. ety. Wb.* Bd. 3, 31。
- (32) 註(23)にあげた Vendryes S-31。
- (33) E. Seebold: *Etymologie*, München 1981, 294f.。
- (34) 註(21)にあげた Tischler A-K. 124f.; J. Puhvel: *Hittite Etymological Dictionary*, vol. 3, Berlin 1991. 7。
- (35) av. suš- は Ch. Bartholomae: *Altiranisches Wörterbuch*, 2. Auflage, Berlin 1961, 1586; khot suvāについては註(25)にあげた Bailey 428; 近代インド・アーリア語の形は R. L. Turner *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*, Oxford 1966, Nr. 12547; 註(25)にあげた Mayrhofer *Kurz. ety. Wb.* Bd. 3, 361, 401。トカラ語の形は不明。

この論文の執筆にあたり、とくに肝臓の占いについてのメソポタミアとヒッタイト語関係の資料については大城光正、吉田和彦の両氏のご援助とご教示をいただいた。記して感謝の意を表する。

Die Leber im Indogermanischen

K. Kazama

Im Indogermanischen gibt es zwei Wörter, die die Leber ausdrücken. Das erste ist ein typisch heteroklitisches Nomen, das durch die Vergleichung der altindischen, griechischen und lateinischen Entsprechungen als *yek^wrt rekonstruiert ist. Das zweite ist auf Grund von heth. leši-, lišši-, arm. leard und den germanischen Formen als *lē(i)s-rt vorausgesetzt. Man hat manchmal versucht, diese beiden Wörter auf eine Form in der Ursprache zurückzuführen, Der Gedanke ist sehr interessant, aber schwer anzunehmen, Denn die beiden Nomina sind nach der Form so verschieden, daß man sie aus einer Grundform nicht herleiten könnte.

Als die Alten etwas von einem Gott wünschten, mussten sie ihm ein Tier als Opfer darbringen. Dabei wurde der Körper des geschlachteten Opfers sorgfältig vom Priester geschnitten und geteilt. So konnte man anatomische Kenntniss mehr als moderne Menschen bekommen. Wofür fanden die Alten die Leber im Körper besonders wichtig? Auf die Frage kann man antworten, daß die Leber für die Wahrsagung durch die Leberschau viel benutzt wurde. In diesem Aufsatz zeigt der Verfasser merkwürdige Stellen, die die Leberschau in den alten Sprachen zeugen.

Der Aufsatz ist eine der kultur-historischen Sprachforschung, die der Verfasser fortgesetzt habe.